

## 古代ペルシア王の巡幸

春田 晴郎

### はじめに——「移動」の分類と視点——

本論に入る前に、「移動」についての分類を行ない、それを分析する視点をいくつか提示しておこう。

まず、人の移動とそれ以外の移動に分けることができる。後者はさらに「モノ」の移動と情報の移動に細分化できるだろう。これはこれで興味のある課題であるが、以降では「人の移動」に話を限定する。

さて、「移動」を考える際、どの集団を単位にして分析するかが重要となる。下位の集団や個人にとって「移動」でも、上位の集団にとっては、「配置転換」「拡大」「縮小」にすぎない場合が多いからである。会社内の転勤は、会社にとっては「配置転換」に過ぎない。男子が結婚して家を出ることを、「家」単位で見ると、「拡大」と捉える社会は多いだろう。また、上位の集団については、アメーバの原形質流動のように、「拡大」と「縮小」を組み合わせ、結果的に移動する、というタイプもある。さらに、下位の集団や個人では、自らは移動していないのに、まわりの環境が激変して、移動してしまったのと同じ状況になる場合もある。これも広義の移動に含められるだろう。これは多くの場合、上位の集団が縮小して、下位の集団が「取り残されて」しまった結果として生ずる。以上、見てきたように、移動を分析するには、どの単位に焦点をあてるかで、様相が大きく異なってくることに、常に留意しておく必要があるだろう。

続いて、「移動」を分類する基準をいくつか挙げてみよう。

まずは、上に述べたこととも関係するが、「移動する単位」が、個人か、家族か、あるいは部族ないしそれ以上のレベルか、という点である。家族以上の集団に対しては、ばらばらに移動する場合と一斉に移動する場合にさらに細別できる。

「一時的な移動」か「永続的な移動」によって分けることもできる。「通勤・通学」は「一時的な移動」であり、現代日本での「引っ越し」は通常の場合、「永続的な移動」となる。

「繰り返される移動」と「一回のみの移動」、という点も分類の基準である。これは、個人を対象とした場合は、上の一時的・永続的という区分とそれほど大きな相違はないが、上位集団から見た場合は、両者は異なる。また、分析する時間の単位のとり方によって、「繰り返し」か「一回」かは変わってくる。細かく一日～一年単位で見れば、繰り返される現象であるが、巨視的に見れば限られた一時期の現象、というものも多い。

「自発的な移動」と「強制的な移動」の相違も重要である。「強制的な移動」の極端な例として、アウシュビッツへのユダヤ人の移送、を挙げておく。ただし、家長にとっては「自発的」であっても、他の家族の成員にとっては「強制的移動」であるケースも考えられる。そもそも、「自発的」といっても移動元の生活難からやむを得ず移動する場合などを考えると、「自発的」

が可能である。

移動の目的による区分もある。多くの移動は、「移動先に目的がある」ものであろうが、中には、「移動そのものが目的」という移動もある。旅行や巡幸は、このケースに該当する。

以上のように、さまざまな基準によって、人の移動を分類することができる。もちろん、この他にも、軍事的か平和的か、公務かプライベートか、などで分類することもできるだろう。

移動を分析する視点も、上に述べた移動の種類に応じて、変わってくる。しかし、多くに共通するものとして、「移動元の変化」「移動途上の変化」「移動先の変化」「移動元と移動先の関係」が挙げられるだろう。「移動そのものが目的」の場合を分析する際には、「移動の機能」を詳しく見る必要がある。

本稿では、以下、西アジアの大半を支配した大帝国、ハカーマニシュ（アカイメネス）朝ペルシア（前550頃-前330）の「王の巡幸」をとりあげて分析する。「巡幸」は、一時的であるが繰り返される移動で、また「移動そのものが目的」である。「王の」巡幸であるが、もちろん王が一人きりで行なうものではなく、移動単位を何と見たらよいか、という点も問題になる。

### 1. ハカーマニシュ（アカイメネス）朝ペルシア王の移動

ハカーマニシュ朝ペルシアの王が、4つの都、すなわち、ペルシアのペルセポリス、エラム（南西イラン）の古都スーサ、メディアのエクバタナ、バビロニアのバビロン、を移動していたことは良く知られている。佐藤は、ペルセポリスから出土した城砦文書 *Persepolis Fortification Tablets* からも、このことがある程度裏付けられることを示した【佐藤 1973】。

城砦文書には、旅行者への糧食支給テキストというジャンルのテキストが存在する。王や高官の発行する「押印文書 *halmi*」を携えた公務旅行者（使節団や王族の移動を含む）に対する、食糧や馬糧の無料支給を記録したテキストである（押印文書については、川瀬 1998 を参照）。この「押印文書」は、各都市に旅券局のような組織があってそこが発行するのではなく、王がその地にいれば王、不在であればそれに代わる高官が発行している。このような「押印文書」の性格によって、王の所在を推定することができる。

たとえば、スーサから来た旅行者が王の押印文書を携えていれば、当時、王はスーサにいたことが判明する。同様に、ペルセポリスから出発する旅行者が、王の押印文書によってペルセポリスで支給を受けていれば、王はペルセポリスにいるし、高官の押印文書による支給ならば、王は不在である。スーサからの旅行者もペルセポリスからの旅行者も高官の押印文書を持っているときは、王はこの両都市にはいない。夏であれば、イラン高原のエクバタナ方面に巡幸しているのであろう。その他、「スーサの王の下に行った」と記述してあるテキストからは王の所在は明らかであるし、ペルセポリスへやって来た旅行者が「王の下に行った」と書いてある場合も同様である。「王の前で」糧食が消費されたことを記すテキストも存在する。

このような旅行者への支給テキストなどから、佐藤は、ダーラヤワウ（ダレイオス）1世が、スーサにいたことが比較的多く、新年祭時にペルセポリスに滞在していた事例や夏季に両都市にいない例などを挙げて、王が「行政府をスーサにおき、季節的にエクバタナやバビロンに巡

幸し、新年祭にはペルセポリスを訪れたという従来から説かれてきた見解は、城砦文書によっても証される」とまとめた[佐藤 1973]。

## 2. 山岳諸族への「贈り物」

ハカーマニシュ朝の王は、なんのために移動していたのだろうか。この問を考える際にきわめて重要な参考となるのが、王の「贈り物」を帝国支配という観点から分析したブリアンの研究である[Briant 1982: 81-94]。彼の論は、佐藤によって要領良くまとめられているので、それに依拠して紹介してみる[佐藤 1988]。

ブリアンは、後代のギリシア語史料に、ペルシア王がザグロスの山岳民族に税・貢ぎ物を収めていた、という記述が出てくるのに注目する。

アレクサンドロスの東方遠征を著したアツリアノスは、「山地ウクシオイ人と呼ばれる連中はペルシア人にも臣属していず、このときもアレクサンドロスの下に使者を送って、自分たちが従来ペルシア王から徴収してきたそれと同額（の通行税）を、アレクサンドロスからも受け取らないかぎり、彼が軍勢を引き連れて領内をペルシア人の地（ペルシス地方）へと通り抜けることは許さないといいよこしてきた」(III.17.1)と記している。

ストラボンも同様のことを述べている：「山地を通る狭い路は越え難く住民は盗賊を業とし、当の王たちでさえ、スサからペルシア族の地方へ入る際にはこの住民から報酬の取立てにあう」(XI.13.6)。同じく、ストラボンによれば、「ネアルコスによると、盗賊を生業とする部族は4つで…(中略)…。そして、歴代の王はこれら四族すべてに対して貢納を行い、コッサイオイ族は、王がエクバタナで夏期を過ごした後バビュロニア地方へ下る折には、特別に贈物をもらっていた」(XV.3.4)。

ブリアンは、これらの記述が、ペルシア王よりアレクサンドロスが偉大であることを示そうというイデオロギイ的性格をもち、必ずしも事実を正しくは伝えていないことを強調する。しかしながら、ペルシア王は力的にはこれらの諸族をはるかに凌ぎ、また都から都への移動に際してもこれらの諸族の領地を必ずしも通過する必要はないことも事実である。したがって、王はやむをえずこれらの諸族に「贈り物」をしていたのではなく、まったく自発的に行っていたことに相違ない。

では、このペルシア王から山岳諸族に自発的・自由意志で贈与することに、どのような意味があるのでしょうか。ブリアンはこの点を、モースの『贈与論』に基いて説明を試みる。自発的な贈与によって、贈った側が優位に立ち、受け取った方が拘束されることをこの事例に適用する。ペルシア王は山岳諸族に贈り物を贈ることによって、彼らとの間に平和的關係を築き、贈られた側は返礼として兵士を提供する、というのが彼の結論である。山岳諸族がペルシア軍の中に加わっていたことは史料からも確認される。

以上のような、ブリアンや佐藤の研究を、王の「移動」という側面から、捉え直してみよう。ペルシア王の都から都への移動は、その途中での行為にも重要な意味があった。上の分類でいえば、「移動そのものに目的がある」ケースである。現地あるいは周辺の集団との応接によって、帝国の支配や人員などの徴収体制が確認される。王の「巡幸」は、帝国・異民族支配を

円滑に行なうための重要な政務なのである。

### 3. 「都」とは——スーサについての研究

ペルシア王の巡幸の機能については、この王朝の「都」を分析することによっても考察することができる。

先に述べたように、ハカーマニシュ朝には、4つの都があり、その中ではスーサが行政の中心として考えられてきた。しかし、長年、スーサを発掘してきたブシャルラは、1997年に、ハカーマニシュ朝下のスーサについて従来の理解を覆す論稿を発表した [Bouchariat 1997]。

彼は、スーサにはハカーマニシュ朝時代の遺構として、ダーラヤワウ1世の宮殿やルタクシャヤサ（アルタクセルクセス）2世の離宮などが存在するが、19世紀末からの長年の発掘にもかかわらず、その他の遺構や遺物があまりにも貧弱であることを強調する。彼は「失われた証拠」という項で、ハカーマニシュ朝時代のスーサに関する、次のような否定的な結果を列挙している：1. 遺跡の規模に比して、ハカーマニシュ朝の建造物が少なく、また北の一角に集中しているのみであること。2. 城砦の欠如。3. 神殿の欠如。4. 墓地の欠如。5. 文字史料の欠如。6. 遺物が非常に少ないこと。

これに続く、「ハカーマニシュ朝のスーサをもとめて」の項で、「遺物の年代比定が間違っており、他の時代に属するとされている遺物が実際はハカーマニシュ朝のものではないか」「遺跡の他の箇所から新たな建造物が発掘できるのではないか」「ハカーマニシュ朝時代の遺構は、後の時代に破壊されてしまったのではないか」という可能性を慎重に検討した上で、その可能性が低いことを彼は示している。

こうして得られた結論は、かなり衝撃的である。「今後の遺物の発見はたしかに除外できないが、ハカーマニシュ朝を通じて、この都市は永続的な建造物によって密に居住されてはいなかった、というのが結論に違いない。ハカーマニシュ朝下のスーサは、ほとんど空っぽであったかのように見える。」 [Bouchariat 1997: 66]。

この「空っぽの王都」とギリシア・ローマ側の著作やペルセポリス城砦文書から窺えるスーサとをどのように整合させたら良いだろうか。ブシャルラは、都スーサを、専門化した永続的な建造物に囲まれた近代の首都のように考えてはいけないと戒める。先に述べたように、王は、貢ぎ物を受け取り贈り物を贈るために都から都へ寄り道しながらゆっくりと一年のかなりの期間を移動しているのである。そして、この移動は、護衛や王室付きの召使いのみならず、行政スタッフも伴っていたに違いない。この移動する集団こそが「政府」であり、真の意味での「都」なのである。王そして政府がスーサに滞在する期間が相対的に長かったから、スーサが行政上の都とされる。しかし、それはスーサに官庁街が建ち並んでいたことを意味しない。王や政府スタッフのキャンプが並んでおり、時期が来れば撤収して移動するのである。遺構、遺物が貧弱な理由はこれで説明できる。

こうした考えに立てば、ペルセポリスやスーサにおける巨大建造物としての王宮の機能も説明できる。これらは狭い意味での実務行政のために建てられたのではなく、政治的誇示のために建築され、機能していた、とみることができる（ペルセポリスの建造物は地方行政の拠点と

しても機能していたが)。

ブシャルラは、論文を、「ダリウスの宮殿や若干の他の建物を含むのみであるスーサの都市は、帝国の行政上の真の中心であるというよりは、時折使用される壮麗なで空っぽなショーケースであったろう」とまとめている [Boucharlat 1997: 67]。この場合の「スーサの都市」はもちろん固定的なハード面を指すのであるが、これが「空っぽのショーケース」であるということは、とりもなおさず、「移動する中身」の重要性を指し示すことでもある。

#### まとめ

ハカーマニシュ朝にとって「王の巡幸」とは、単なる個人的な旅行に留まるものではなかった。「王の巡幸」とは、同時に「政府の移動」であり、また中央政府と地方の民との関係を確認する重要な場でもあったのである。もちろん、これは道路・通信網の整備 [川瀬 1998] があって可能になるのであり、帝国内における他のさまざまな「移動」の発展とも結びついていた。

#### 参考史料・文献

- フラウイオス・アッリアノス (大牟田章訳註) 『アレクサンドロス東征記およびインド誌』 東海大学出版会、1996。
- ストラボン (飯尾都人訳) 『ギリシア・ローマ世界地誌』 龍溪書舎、1994。
- 川瀬豊子 1998: 「ハカーマニシュ朝ペルシアの交通・通信システム」『岩波講座世界歴史2 オリエント世界』 岩波書店、301-318。
- 佐藤 進 1973: 「アカイメネス朝ペルシア王室経済の研究(一)」『史学研究 (東京教育大学文学部紀要)』 11、1-26。
- 佐藤 進 1988: 「ペルシア帝国税制に関する一考察」『史潮』 新24、49-59。
- Boucharlat, R. 1997: Susa under Achaemenid Rule. In: J. Curtis ed., *Mesopotamia and Iran in the Persian Period*, London, 54-67.
- Briant, P. 1982: *État et pasteurs au Moyen-Orient ancien*, Paris.